

## 論文審査要旨及び担当者

報告番号 甲 乙 第 号 氏名 深瀬有希子

## 論文審査担当者

主査 慶應義塾大学文学部英米文学専攻教授 巽 孝之  
文学研究科委員、Ph.D.

副査 一橋大学大学院言語社会研究科助教授 新田啓子 Ph.D.

副査 東京大学教養教育開発機構助教授  
メアリー・ナイトン ( Mary A. Knighton ) Ph.D.

## 論文題目 “Blackness at the Crossroads:

Toni Morrison and Multicultural Modernism”

深瀬有希子君の本論文は、1980年代後半以降の多文化主義批評、ポスト・コロニアル批評理論、ジェンダー理論の勃興を承けた黒人文学批評がアメリカ文学の「白さ」を問い直すなかで、「黒さ」をも自己批判的に再考するようになった文脈を考慮しつつ、現代アメリカ黒人女性作家の代表格トニ・モリスン(Toni Morrison 1931-)の長篇小説群に描かれる「黒さ」と「モダニティ」とを、“Signifyin(g)”と “mastery of form”という鍵概念をもとに分析し、黒人モダニズム表現のうちに多文化的モダニズムの可能性を洞察しようとする、手堅くも独自性あふれる研究である。

本文各章は以下のように構成されている。

Introduction: “Signifyin(g)” upon Huck Finn: *Beloved* as Cultural Artifact

Chapter 1

Ethnographic Self-Fashioning: *Song of Solomon* as a Passing Narrative

Chapter 2

Blackness in Motion: Possessing Magical Breasts in *Tar Baby*

Chapter 3

Careful Narrators: Ethnic Modernism in *Jazz*

Chapter 4

Re-imagining Black Nativity: *Paradise* as a Crossroads Narrative

Conclusion: Tracing Wrecked Women: A Black American Beach in *Love*

Bibliography

## 論文の概要

序論では、1980年代以降のアメリカ文学における多文化主義的批評を概観したうえで、1993年ノーベル文学賞受賞作品である『ベラヴド』(*Beloved* [1987])をマーク・トウェインの『ハックルベリー・フィンの冒険』(Mark Twain *The Adventures of Huckleberry Finn* [1885])と併置し、前者の黒人女性主人公セサの逃亡を助けるという重大な役割を担う季節労働者「白人」少女エイミーの文化的「黒さ」を分析した。

第一章は、1980年代半ば以降の、ポスト・コロニアル文化人類学批評(具体的には、ジェイムズ・クリフォードによる民族誌における詩的言語の政治性の検討、ガヤトリ・スピヴァックによるサバルタン研究、ジュディス・バトラーによる人種・セクシュアリティ扮装の議論)を踏まえて、『ソロモンの歌』(*Song of Solomon* [1977])に1920年代に活躍した黒人文化人類学者・作家ゾラ・ニール・ハーストン(Zora Neale Hurston)の人種・ジェンダー観の残響を聞き取りながら、黒人男性主人公ミルクマンを現地の情報提供者から民話を収集する一民族学者とみなし、本小説を民族誌についての物語として読み直した。

第二章では、“diaspora mother”という、民族の地理的移動とジェンダーの問題とを接続した言葉に注目して『タール・ベイビー』(*Tar Baby* [1981])を扱い、とりわけ黒人表象文化批評家ポール・ギルロイの「ディアスポラ論」を背景に、パリで学ぶ主人公のジェイディーンを、アフリカン・アメリカンの文化的遺産から切り離されつつ起源回帰の重要性に目覚めていく存在としてではなく、アメリカ、カリブ、フランス間の地理的移動で生まれる、文化の変容を体現する存在として再読した。

第三章では、『ジャズ』(*Jazz* [1992])を1920年代の代表的モダニスト作家F. スコット・フィッツジェラルドの『グレート・ギャツビー』(*The Great Gatsby* [1925])と比較考察し、ウォルター・ベン・マイケルズ、マイケル・ノース、ワナー・ソラーズ、アン・ダグラスらの理論を足がかりに、20年代・30年代の白人モダニズム文学が同時代の黒人ないしは移民文学と密接に関わっており「エスニック・モダニズム」(ethnic modernism)と呼ぶべき言説空間が成立していたこと、この長篇からはネイティヴィズムと結節した文化多元主義(cultural pluralism)から多文化主義(multiculturalism)への変容過程で、抑圧・喪失された物語を書く・読むときの態度がメタフィクショナルなかたちでうかがわれることを浮き彫りにした。

第四章では、『パラダイス』(Paradise [1998])で舞台となるオクラホマ州の多民族・多文化的性質に注目し、黒人だけの町ルビーで毎年行われる「キリスト降誕劇」(nativity play)が「黒さ」の概念そのものや、起源と記憶との永続を信じる幻想を問い直すための装置であること、ルビーの町の外に存在する「修道院」がアメリカ各地から集まってくる女性たちの到着地・定住地のみならず未来へと進むための通過点であることを明らかにしたうえで、ロード・ノヴェルの代表作、ジョン・スタインベックの『怒りの葡萄』(John Steinbeck, *The Grapes of Wrath* [1939])との文学的想像力の交錯をも示した。

結論では、モリスンの最新作『ラヴ』(Love [2003])に描かれる黒人モダニティの問題を考察し、60年代の公民権運動以前にすでに黒人企業家として成功した黒人男性ビル・コーギーが公民権運動後に親族の女性たちを巻き込みながら社会的・経済的に没落する展開に注目しつつ、そこで舞台となる南部のブラック・ビーチが、奴隷貿易の行われた大西洋上の中間航路、さらには奴隷船からアメリカの浜辺に打ち上げられた黒人や移民をも想起させながら、多民族国家アメリカにおける文学的想像力の交錯、“crossroads”を示す地図そのものとして読むことができることを証明した。

## 審査の要旨

深瀬有希子君の博士号請求論文に関して、審査委員会は2006年12月11日(火)の夕刻、研究室棟にて2時間を超える口頭試問を行なった。その結果、審査員一同は、これが1993年、アメリカ黒人(女性)として初のノーベル文学賞に輝いたトニ・モリスンの諸作品に対して、いまなお「黒人表現の伝統」や「母娘の絆」や「奴隷制の記憶」などアフロ・セントリックな発想にこだわり続ける旧来の批評的伝統を果敢にも打破する手堅い方法論を編み出した、思索力あふれる研究成果であることを、実感した次第である。

旧来軽視されてきたマイノリティ集団に属する作家は、いったいなぜ人種・ジェンダー・階級をめぐる表象の正義を問いたださねばならないのか？ これはアメリカ黒人文学研究の広く容認される出発点だが、にもかかわらず深瀬君はそうした政治的意図を「人種的対立」の問題には留めず、あくまでもアメリカ文学の物語学的伝統に繫留された地点で、精査しようと試みる。彼女によればモリスンは、よく言及されるフォークナーのみならず、ソロー、トウェイン、

ジェイムズ、フィッツジェラルド、スタインベックらと対話的に読むことができ、そうした dialogic かつ intertextual, contrapuntal な視点から読むことでアメリカ文学史上におけるマイノリティ作家の足跡を再確認させてやまない。モリスンはつまり、人種的アイデンティティに深く意識的な作家でありながら、同時にその構築性を看破し、人種というカテゴリーに依拠すること自体の弊害をも暴露し、黒人共同体の虚偽や問題性を果敢に批判する作家でもある。

本博士論文はこのように その達成度においては未熟なところや不完全な点も多いとはいえ モリスンという作家の作品研究を行うのみならず、アメリカ文学制度そのものの「雑種性」や「混淆性」を確認し、さらには、むしろ多くの黒人創作を歴史的に支えてきたパフォーマティブな書き換えの事実を傍証する、独創的な研究である。著者の作業はすなわち、白人文化による残虐行為が黒人集団に与えた歴史的な痛みや疎外を厳しく告発するモリスンの作品の本質が、図らずも白人的「正典」の二項対立的否定にあるのではなく、そこに接ぎ木されたものに相違ないことを、明らかにするのである。そうした事実の検証は、より複雑なポストコロニアル的知見の可能性を開き、かつ本質的自衛闘士の対立を超えた権力関係への省察を可能にする文学研究の基礎として、高く評価されねばならない。

深瀬君の洞察力に磨きをかけたのは Henry Louis Gates, Jr. の *The Signifying Monkey* や、Paul Gilroy の *The Black Atlantic* や、Walter Benn Michaels の *Our America* や、Michael North の *The Dialect of Modernism* や、Werner Sollors の *Neither Black nor White* 等が代表するような、アイデンティティの流動性や構築性と、それを表現する人種表象の戦略性や創作的計算を前景化した、新しいタイプのマイノリティ文学批評だが、これらの成果が、モリスン批評の「正典」をなすブラック・フェミニストたち Barbara Christian や Deborah McDowell や Nellie McKay のアイデンティティ派解釈の遺産と融合した一点で、深瀬君の「多文化的モダニズム」は理論化されている。この着想と多角的研究姿勢に、審査委員会は惜しめない賛辞を贈るものであり、より洗練されたモリスン研究の到来を告げる一試論として、この論文が学位を得るにふさわしいものであることを、認めたい。しかし以上に記してきたような本論文の可能性が、実際に深瀬君自身の議論で十全に表現されているかと言えば、いくつかの疑問点が残るのもたしかである。

序章ではまず、トウエインの『ハックルベリー・フィン』を書き換える作品

として『ピラウド』を再評価するという衝撃的な視点により本研究の基本的問題意識を好ましく明言することに成功しているが、とはいえ主人公ハックがその文化的混淆性にも拘らず、黒人奴隷ジムへの配慮に限界を示していることをジェンダー論的に指摘するモリスン自身の読み方を經由し、彼女の「書き換え」を検証するプロセスでは、黒人集団に内在する重層的な権力問題を捨象してしまっているだけに、いささか議論が単純化していくきらいがある。

第一章における『ソロモンの歌』(1977)の分析で興味深いのは、「エスノグラフィ」という、一つの権威を標榜した主体的行為が黒人に与えた有意性と問題性の両方を深瀬君が解きほぐそうと試みたことであり、その結果、彼女は主人公ミルクマンの「エスノグラフィ的自己成型」が、北部で生まれ育った彼が南部の民俗的伝統の一部に「なりすます」ことを可能にし、彼の傲慢な自己認識を打ち砕くことにもなったアイロニカルないきさつを雄弁に解き明かして、本論文全体のうちで最も説得力のあるセクションとなっている。

続く第二章が主題とする『タール・ベイビー』(1981)を読み解くのに援用されるディアスポラ概念は、時空を超えてなお純粹に生き続ける一つの民族のあり方ではなく、ポール・ギルロイ的な、空間的移動の過程における「変わりゆく同一性」をつまびらかにしていく、社会構築的歴史修正主義とも言える理論に彩られているが、その割に著者自身の論の運びが二項対立の本質からも逃れていないところが、気にかかる。著者は、モリスンには我々が期待する程「越境的」ではない面もあるという事実から、逃れてはならない。モリスンのブラック・フェミニズム的な立場が証すように、彼女がポストモダンや社会構築主義の最先端からでは読み得ない「基盤」を信じる作家でもあることの検証なくしては、せっかくの「多文化的モダニズム」というモデルも、一気に空虚さを帯びてしまうだろう。

『ジャズ』(1992)を扱う第三章は、まさにこの小説の背景となった1920年代を「ジャズ・エイジ」と呼んだ作家フィッツジェラルドとモリスンを対比し、前者の*The Great Gatsby*の語り手ニックが見落としたハーレム・ルネサンス期ニューヨークの人種的多様性に言及しつつ、その一方で、後者が登場させる己の客観性の欠如を嘆く語り手のマイナー性こそが実は多様性に至り着いているというからくりを、見事に説明し切っているが、ここでも、致命的欠陥とはいわないまでも、著者が依拠するHouston Baker, Jr.の“mastery of form”という概念とは、“deformation of mastery”というベクトルを伴ってこそ、有効だったので

はないか、この点に対する理解をさらに深めるべきではないかという点を指摘しておきたい。

事実上の最終章である第四章は、モリスンの多文化テーマを最も如実かつ中心的に担っていると言ってよい『パラダイス』(1998)を主題とし、著者がこの作品への理解に特に優れていることが一見して明らかな、繊細な議論が繰り広げられており、本博士論文においては、第一章を凌いで最も有意義な成果とみなしうる。同作品の舞台であるオクラホマはルビーという町の歴史が隠し持つ暴力性を吸収し、その町の公的歴史の外部として存在してきた修道院、並びにその共同体を構成する女性たちが、他ならぬスタインベックの「オーキー」が繰り広げると同じ、ロード・ナラティヴを紡いでいるとする省察は鋭く、コンヴェントを飾る十字架の空白にも似るという意味において、モリスン版ロード・ナラティヴが「クロスロード・ナラティヴ」に他ならないことが、十二分に立証される。この結論部は、間違いなく本博士論文が辿り着いた大団円であり、著者がモリスン批評に残し得た貢献の白眉であると言ってよからう。

深瀬君はこうした本論全体をまとめあげるため、結論部で、最近作の『ラヴ』(2003)を扱い、モリスンの「多文化的モダニズム」をより深めようと試みるが、しかしニュー・ニグロのモダニズム観に全く言及することなく、反モダンの象徴であるブッカー・T・ワシントンに関わる議論を強行しようとしているところに議論の無理が生じており、前の章が優れたロード・ナラティヴ論であったにも関わらず、著者は、黒人が記した歴史的な移住の軌跡が、モリスンの物語背景の軌跡とも重なり合いつつ重要な問題を紡いでいるという点をまったく顧みない。もちろんこうした論理展開の不備には、対象作品が刊行後間もないことも手伝っているだろうから、今後の著者が鋭意加筆改稿するのを強く期待したいと思う。著者がこれまでに、複数の権威あるレフェリー制学術誌に論文掲載してきた経緯に鑑みるなら、それは決して不可能ではあるまい。

口頭試問ではさらに、モリスンの人種意識のみならず階級意識について、アメリカ黒人文学におけるモダニズム的「荒地」像について、混血文学が孕む複合的性格について、ひいては彼女にノーベル賞が授与された批評的尺度について多角的な質問が出されたが、深瀬君はその大半に明確な解答を与えるとともに、今後の課題となる留保条件をも詳細に数え上げるといふ、きわめて誠実な姿勢を見せた。将来有望なアメリカ黒人文学研究者の重要な第一歩として、本論文が博士の学位に値することを、審査委員会一同はいささかも疑わない。

1/11/2007